審査の結果の要旨

氏名　村上興匡

村上興匡氏の「近代的葬祭慣習の成立と意識変化――死の個人化に関する社会史的研究」は、明治期から現代までの日本の葬祭慣習の変化をたどり、葬祭に関わって死の観念や死の意識がどう変わってきたかを考察したものである。関東地方の村落部と東京都心における葬儀の変化についての聞き取り調査、葬祭業の歴史、新聞広告の変化、質問紙調査などを資料としながら、村上氏は伝統的な葬祭慣習から近代的なそれへの大きな変化が起こったことを跡づけていく。都市と村落部のさまざまな地域で変化が起こる時期は異なっているが、共通することは、①葬儀の中心行事が葬列から告別式へと変化すること、②葬儀補助主体が地域の葬式組から葬祭業者に変化すること、③遺体処理と埋葬の方法が土葬から火葬へと変化することである。以上３点のうち、前の２点について詳細に論じられる。

葬列による葬儀では地域共同体が死者を送り出すことが中心行事で葬儀の主体は共同体だが、告別式では会葬者が死者に別れの挨拶をすることが中心行事で主体は個人同士の関係になっている。告別式が成立するのは都市生活に適合的な近代的な人生儀礼が整って来る時期にあたる。告別式を創出する上で大きな影響力をもった中江兆民の死生観とそれへの反響について、そしてその後の告別式の普及の状況が論じられている。明治期の葬祭業は都市の葬列を組む葬儀において葬具を貸し出し人足を調達する役割を担っていたが、地域共同体や親族の役割が縮小して来るに従ってそれを肩代わりする仕事に変容していく。葬祭業者は葬儀を営むための知識や技能を提供する職種という性格を強めていく。

こうした変化を推し進めた主な原因は、社会組織のあり方が変化して地域共同体や親族が葬儀を担えなくなったということに帰せられるが、村上氏は葬儀批判の言説や生活慣習の簡素化・合理化の訴えがくり返しなされてきたことにも注意を促している。近代的な儀礼文化を支えるイデオロギー的な側面である。日本の近代国家がその基盤を「家」に置こうとしたことを反映して、共同体としての結束がやや弱まりつつも「家」や家族の葬儀を標準とする意識はむしろ強化されたとも言える。他方、近代化が進むとともに葬儀を支える共同体的な側面が強く維持され表現されるような例もあるとされ、日本独特の現象とされる社葬が好例として取り上げられている。

第二次世界大戦後は社葬のような例外はあるにせよ、共同体の支持が弱まっていくのに並行してますます近代的葬祭慣習が成立し普及していくのだが、一九九〇年代以降になるとさらに個人化の傾向が強まり、近代的葬祭慣習の枠を超えるような死の儀礼や遺体処理のあり方が次第に目立ってくるようになる。故人自身が自己表現として葬儀を演出しようとする意識は新しい。葬儀批判の言説もこの時期には、これまでの葬儀は故人の意思を無視した形式的なものだとするものが優勢になると論じられる。

村上氏は近代日本の葬祭の変化に関わる資料を多面的・重層的に発掘して丁寧に解析して提示して、分厚い記述を行っている。「個人化」「私事」などのキータームの説明が不十分であり、複雑な変容の過程をもう少し分かりやすく整理することもできたかと思われる。しかし、豊かな資料に基づき多様な変化を比較しつつ総合的にとらえることに成功しており、近代日本の葬祭慣習の成立と変容に関する共通認識を形成する上での貢献は大きい。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。